



今年も隅田川の両岸にみごとに咲いた桜を見ようと多くの人々が訪れましたが、墨堤の桜は歌や俳句の主題として多くの歌人や俳人が取り上げており、それらはいずれもしみじみとした情趣に満ちています。

こぎくらべ勝ちたる舟の旗風に
ちるや墨田の夕ぐら花

大和田 建樹

隅田川花や散るらん漕ぐ舟の若
に色ある夕あらしかな

与謝野 鉄幹

これらの歌は、まだまだのどかで情緒豊かであった向島の春の風景を眼前に彷彿とさせます。

さて、木々の新緑がまぶしく、すがすがしい季節を迎えました。今回は墨田の町を文学散歩としやれてみましょう。

隅田川七福神めぐりもかねて、まず向島の三囲神社（向島二・五・17）に詣でましょう。ここは恵比寿、大国の二神をお祀りしています。境内には多くの石碑があります。よく知られているのが、宝井其角の雨乞いの句碑「ゆうだちや田を見めぐりの神ならば」、そして、西山宗因「白鷺や燕分別なる置き所」の句碑、さらに拝殿裏手には、関東大震災の火の手に追われて26歳の若さでこの世を去った富田木歩の「夢に見れば死もなつかしや冬木風」の句碑もあります。そのほかに狂歌碑、川柳碑などなど、味わい深いものばかり。なお、樋口一葉もこのあたりを訪ねたと日記に記しています。



宝井其角の句碑（三囲神社）



宝井其角
（1661年～1707年）

次はすぐ近くの弘福寺（向島五・3・2）です。布袋尊を祀りますが、この寺は、少年時代

我恋は秋葉の杜の下露と消ゆとも人の知るよしもなし

その中から一首、



松尾芭蕉の雪見の句碑（長命寺）

をこの地域ですごした文豪森鷗外が没後葬られ（震災後、三鷹禅林寺に改葬）、江戸時代の文化人、建部綾足の墓碑もあります。

続いて長命寺（向島五・4・4）です。弁財天をお祀りしています。ここの松尾芭蕉の雪見の句碑「いさらは雪見にころふ所まで」は、全国的に名碑として知られています。この辺は江戸の頃は雪見の名所でした。十返舎一九の狂歌碑、5人の狂歌師の辞世の狂歌を刻んだ石碑など、興味のあるものがいっぱい。寺に隣接する桜餅屋には、正岡子規が2ヶ月ほど下宿し、短歌や俳句を多く遺しています。

長命寺から寿老神を祀る白鬚神社（東向島三・5・2）へ行く途中には、幸田露伴旧居跡もあります。長女、文が書いた「流れる」などを讀むと、この辺りの様子がまざまざと思い起こされます。

白鬚神社の近くに、明治25年頃、作家村上浪六が住んでいました。井口朝生の「すみだ川余情」にも江戸時代のこの辺の有様が描かれ、白鬚の森は美しかったとか。

ここから福祿寿を祀る向島百花園（東向島三・18・3）はすぐです。ここには芭蕉の句碑「春もややしきとどのふ月と梅」をはじめ、優れた句碑、歌碑があり、園内をめぐる飽きることがありません。久保田万太郎の「むかしの仲間」、永井荷風の「百花園」など、多くの文学作品があり、訪れる前に一読しておくと、より興味が湧きます。最後に毘沙門天を祀る多聞寺（墨田五・31・13）に詣でて、隅田川七福神めぐりは終わります。

参考 社会教育だより「すみだ」（墨田区教育委員会発行）

訂正 前号の「向島を歩く―その2―」の記事中、函館五稜郭は「箱館五稜郭」の誤りにつき訂正し、ここにお詫び申し上げます。

墨田区ゆかりの絵師 小林清親が描いた本所・向島

すみだ郷土文化資料館専門員 西村 健

墨田区地域の風景は、江戸時代から庶民に愛され、多くの絵師たちによって浮世絵に描かれてきました。時代が江戸から明治に代わっても、浮世絵の人気は衰えませんでした。江戸の光景は大きく変化し、新しい風景や風俗を描いた派手な色彩の「開化絵」とよばれる浮世絵が流行しました。こうした「開化絵」とは異なる、落ち着いた色彩で明治の東京を描いた絵も存在します。これが、小林清親が描いた『東京名所図』とよばれる風景版画シリーズです。清親は弘化4年（1847）に本所御蔵屋敷（現・横網一丁目）で幕府の子として生まれましたが、幕府の崩壊後は絵の道を志し、明治9年（1876）から発表した『東京名所図』シリーズのヒットで一躍人気絵師の仲間入りを果たします。これらの絵は、当時「光線画」とよばれていましたが、こ



東京小梅曳船夜図
明治9年（1876）

れは「光線の変化によって生ずる自然の美観を捉えた絵画」を意味していました。今回は清親の「光線画」のうち、現墨田区地域を描いた作品4点をご紹介します。

東京小梅曳船夜図

本画は、清親が最初期に描いた「光線画」の一枚です。現在の向島三丁目付近の曳舟川通り周辺を描いたとされる本画には、夜の曳舟川を、夫婦と思われる男女が船を曳きながら歩いている様子が、情感豊かに描き出されています。画の下には英語でタイトルが記されていることから、西洋風の版画として売り出そうとした版元の意図がうかがえます。



隅田川夜図
明治13年（1880）

丁目）附近の堤に佇んで竹屋の渡しを待つ料亭の客と見送りの女中を描いた作品であることが想像できます。夜の隅田川が持つ、光と影が醸し出す情緒を、情感豊かに描いた清親の傑作の一つです。

柳嶋日没

画面左端に描かれているのが「柳嶋の妙見さま」とよばれ、役者や芸者の信仰を集めた法性寺（業平五丁目）で、画面中央の建物は料亭の「橋本」です。江戸時代から「橋本」は有名な料亭で、多くの人々がその味を求め、舟を用いてやって来ました。画面右端に子供を背負う女性が描かれたことにより、夕暮れの北十間川畔の様子が叙情的に描かれています。

東京両国百本杭眺之図

両国の百本杭周辺を描いた作品です。百本杭とは、現在のJR総武線鉄橋（横網一丁目）附近の川



柳嶋日没
明治10、11年（1877、78）頃



東京両国百本杭眺之図
明治12年（1879）

際に、強い水勢を弱める目的で水中に多数の杭を打ち込んだ場所のことで、芝居にもよく登場しました。夜明けの薄暗い隅田河畔を走る人力車を、シルエットのみで描いたことにより、静寂な雰囲気表現されています。

人気を博した「光線画」ですが、明治14年（1881）を境に、清親は製作をやめてしまいます。その理由は諸説ありますが、この年に起こった東京の大火事によって、江戸の名残を残す景色が多く焼失したことが一因ではないかといわれています。清親の絵は後年、作家、永井荷風によって、「一時代の感情を表現し得たる点に於て（中略）甚だ価値ある美術と云はねばならぬ」（『日和下駄』）と評価されましたが、現在の私たちも「光線画」から、過ぎゆく江戸に対する哀愁が漂う明治の東京の姿を偲ぶことができます。